

## 要人歴訪

### スパークマンとステールマン

八月二十八日の朝、私は上院事務局にスパークマン上院議員を訪れた。彼はアラバマ州選出の上院議員で、民主党に属し、トルーマン大統領の政友として知られ、今度の講和会議におけるアメリカの全権になっている。頭髪をくしゃくしゃにした飾り気のない童顔の人である。六尺以上の巨軀を敏捷に動かして私のために椅子を運んでくれて、「ここにお座りなさい」という。部屋は細長い十五坪位の大ききで、壁にはアラバマ州の地図と彼の政治生活における出来事の数々を示す写真をべたべた貼りつけてある。隣りに秘書やタイプリスト等の部屋が三つもある。秘書一人、部屋一つの日本とは随分違ふなあと感じつつ、

「講和会議に出席されるそうですね。」

と水を向ければ、

「出席します。」

という。

「グロムイコ次官一行が大挙出席するそうですが、ソ連はどう出ると思われませんか。」

と聞けば、この時のワシントンは暗い重苦しい雨模様の天気であったので、窓の方を向きながら、

「いや、今日の世界は今朝のワシントンの天気のようなものです。しかし何時までもこんな重苦しい天気が続く筈はありません。何時の日か自由世界に快晴の日が訪れますよ。」

と答えた。

「対日平和条約はよく出来ていると思われませんが。」

と聞けば、

「今日われわれが期待し得る最良の条約だと思えます。実の処最初予想していたよりもずっといい条約が出来ました。そのいいという意味は、お国にとって寛大になったということです。」

「貴方はトルーマン大統領の対外援助政策を積極的に支援している人として日本においても有名ですが、何かそれについてお話を伺うことが出来れば幸いです。」

と尋ねると、彼は齒切れのよい雄弁な英語で、

「今日のアメリカは孤立政策を完全に清算して、国連を積極的に支持し、自由国家群の協力を強力で推進することが対外政策の根幹になっています。また、そのみがアメリカ自体の安全を確保する道です。しかしアメリカは、道楽で外国に軍事や経済の援助をしているわけではない。アメリカにも随分困った生活をしている人が多いのです。」

といいながら、低収入家族の実態調査表を示しつつ、

「われわれはこの問題をも決して等閑に附しているわけではないが、しかし尚強力に対外援助は推進しなければならぬと思っています。」

とリスミカルな抑揚をつけて答えた。

「それではこれで失礼します。」

といって立上りかけると、一緒に写真を撮って行かないかといって秘書を呼んでくれた。十三年間、下院議員をして上院に推されたこの人は、流星に数次の選挙を通して民衆に親しまれ、

愛される政治家だという印象をつけた。

上院事務局を出た私は、その足でかねてから紹介され、十一時十五分に面会の約束をしてあるステールマン氏（大統領顧問）をホワイトハウス別館に訪ねた。ステールマン氏は元来、労働問題の大家で国防動員局長官をされていた人である。彼の座っている席の後方の窓を通して、修理中のホワイトハウスが見える。

「貴方は科学振興についてステールマン報告を出された人と聞いていますが、その辺のことをもう少し詳しくお話を伺えたらと思います。」

と聞けば、

「いや現在の私は全然別の仕事をして大変忙しいし、その報告はもう旧聞に属するので十分語る資格はありません。ただアメリカは、日本と同じように、基礎的研究は西欧から輸入してその応用ばかりやっていたのです。早い話がレーダーにしてもペニシリンにしても、これは皆欧州で発明されたものです。これでは困ると思って、思い切って基礎的研究に熱を入れなければならぬというのが私の報告の趣旨です。」

と答えつつ、

「アメリカに来て十分エンジョイされていますか。」  
と如才なくいわれるので、

「イエス、ヴェリ、マツチ。」

と型通り挨拶すると、今度は

「何日まで滞米されますか。」

といわれる。

「約三カ月で各地を旅行します。」

と答えると、

「ともかくアメリカをよく見てよく知ってください。学校、教会、新聞社などはもとより、あらゆる種類の家族を訪ねて、アメリカ人の生活の実態をよく把握して下さい。又いろいろの職業の人と話をして下さい。お互いに知り合うことが協力の地盤です。」

小麦色に日焼けした健康そうな明るい顔をしたステールマン氏は優しく語った。柱時計が十二時になったので、私はホワイトハウスを辞去して、小雨のそば降るペンシルヴァニア街を都心に向けて歩いて行った。

## ジョンストン

アメリカの臨戦経済における生産増強の問題については、さきに資材生産のナッシュ氏と会  
い大体の方向を知り得たが、かかる急速な生産増強はどうしても賃銀や物価の騰貴を招き、経  
済の悪循環を結果することになる。強靱なアメリカ経済も戦争経済のこの原則に決して例外で  
はあり得ない。アメリカ政府はかかる大勢をどう制御して経済の安定を確保しようとしている  
かについて、私は経済安定本部を訪ねてその間の事情を聴取したいとかねがね思っていた。幸  
い旧知のドーナルド氏（映画協会理事）の親切な計らいで、経済安定本部長官のエリック・ジ  
ョンストン氏に会うことができた。九月十一日の午後五時という約束であったので、私は復興  
金融ビルの三階にある氏のオフィスを訪ねた。三十分もたったころ長身でやせ形の感じのよい  
紳士が現われ握手を求めた。それがジョンストン氏であった。

「生憎ホワイト・ハウスに要務がありまして、こんなに遅くなって失礼しました。」  
と立ったまま挨拶しつつ、自分の机の上にあったシガレット・ケースをとって勧めてくれる。

「お役目柄毎日御骨の折れることを御察しします。」

「いいえ、骨の折れるのはむしろ御国の方でしょう。」

と逆手をやられて、いささか出鼻をくじかれた恰好になった。

「仰せの通りです。条約は出来上つても外交面はもとより国内政治の面でも予想以上に困難に直面すると思います。さらに財政や経済の問題が厄介になると思います。」

「しかし私は決して悲観しません。人間の成しとげるであろう偉業（ヒューマン・アチーブメント）には限界はないわけです。唯人智に限界があるだけです。困難な局面になればなる程われわれは勇気を出さなければいけないと思います。」

突然、ジョンストン氏は

「ときに日本の人口は毎年どの位殖えますか。」と反問した。

「正確には存じませんが、百五十万人位ではないかと思えます。」

「実は先日、私はバルチモアの農事試験場を訪ねて驚くべき実験を見ました。それはよく洗ったキャベツやトマトやピーナツの種子を水面に蒔いておいて、その水に特殊な化学的操作を施すわけです。そうすると立派なキャベツやトマトができます。所要面積は普通の畝の三分の一で結構だし、成育時間は二十五分の一で足りませう。つまり七十五倍の能率をあげることにな

ります。この実験は南部ではもっと活発に大規模にやっております。マルサスの法則（人口は幾何級数的に殖えるが、食物は算術級数的にしかな殖えないという経験則）を御承知でしょう。この法則はやがてその妥当性を失います。この実験が広く世界に応用されるようになると、御国の人口はわけなく片付くわけではありませんか。さらに、われわれは天然ガスやアルコールから人造羊毛をとり出すことにも成功しました。このように人智は日を追って発達しています。われわれは、これからのヒューマン・アチーブメントに期待をかけようではありませんか。」

さも愉快そうに話して席を立ち、右手にある大きい地球儀の表面をなでつつ、

「これが御国ですね。」

と日本のところを指でおさえて、

「ときにシベリヤに抑留されていた日本人は帰りましたか。」

と尋ねる。

「いやまだ相当残っていると聞いていますが。」

「一体どんな仕事をしているのでしょうか。また待遇はどうですか。」

「肉体労働に従事しているのじゃないかと思えます。私の義弟も未だに何の消息もない始末



です。ただ帰った人から聞くと、ロシア人というのは人種に対する差別観が少いからつき合い易いと申しますが。」

「その通りです。非常に差別意識が乏しいように見えます。」  
と強調して、さらに

「しかしよく観察をすると、それはうわべだけのことですよ。実は私、スターリンの招請で一九四四年の夏八週間程ロシアを旅行して、大変な歓迎をうけました。シベリアもずっと歩きました。ところがソ連邦を構成している共和国に行ってみると、政府の要職にはトルコ系とかモンゴル系とかいうのは一人もないことを発見しました。とくにユダヤ人に対する圧迫はひどいもので、最近でもユダヤ人はどんどんイスラエルの方へ亡命している有様です。」

「スターリンに会われましたか。」

「ええ、モスコウで三時間程スターリンと会談しました。一つ面白いエピソードを話しましょうか。その会談のうちで私がしばしば五カ国会議（米、英、仏、ソ、中）を提議しましたところ、彼は不思議な顔をして、  
「中国を入れるのは賛成出来ない。むしろベルギーでも入れたらいいだろう」といのです。私がなぜかと聞きただと  
「白人の会議ではありませんか。」

それに中国は自分のことを自分で始末がつかないではありませんか」と答えるのです。ところが何時の間にか毛沢東と仲よくしていますね。しかし私の見るところでは、スターリンが毛沢東になんで大きい権限を与えるものですか。これがロシア人の本当の考え方であり、やり方です。」

「もつとも、われわれもニグロの問題に手をやいています。実のところ異人権の取扱い方についてはロシアに学ばなければならないところがあると思います。……ときに滞米の御感想はいかがですか。」

「皆様が大変親切にしてくれて愉快にやっています。」  
 「対日感情は見違える程よくなりましたね。もつとも本当は、これもアメリカのセルフ・インタレスト（自分勝手）から出たものだと思います。それにしても良くなることは歓迎すべきことです。」

私は物価や賃銀について一言のやりとりもないまま辞去したが、彼の話聞いてこれでいいのだと思った。又アメリカの要人の垢抜けのしたマナーと広い見識に接したことを悦んだのである。

## ウィルソン

去年の秋、中共が朝鮮事変に介入してきたため、世界政局は異常な緊張味を加えた。その直後の十二月十六日、トルーマン大統領は非常事態の宣言を発表、「侵略的共産主義者の脅威はますます強大になってきた。アメリカの国防はいち早く強化されなければならない」と語った。その日に国防動員庁が創設され、ゼネラル・エレクトリックの社長チャールズ・ウィルソン氏は直ちに社長を辞任、その長官に任命された。ウィルソン氏は第二次世界大戦の動員計画に大きい役割を演じた人である。

国防動員庁というのは、いわゆる国家総動員を司る最高の企画機関で物資の生産、調達はもとより、人力の動員、物価、賃金ないしは輸送力の統制など広汎な権限をもっている。しかし直接統制の衝に当ることなく、なるべく既存の政府機関の能力を高度に動員することにして、自らはその指導と整合ないしは監査に主力を注ぎ、約百名程度の要員がいるにすぎない。そして物価、賃金の統制と戦略物資の生産調達という仕事は、その下に経済安定本部と資材生産本

部の二つの大きい執行機関を擁してこれを担当せしめている。私はかねてからこのウイルソン氏に会見を申込んであったところ、九月二十日の午後三時にオフィスにくるようにとの電話があったので、ホワイトハウスの右側にあるオールド・ステイト・ビルにある氏のオフィスを訪ねた。しばらくすると、あから顔の見るからに精力的な長身のウイルソン氏が食事から帰ってきた。ロイド眼鏡の奥に鋭い眼が光っていて、ただならぬ鬼気を感じる人物である。多少質問の用意はしてきたが、彼のたたずまいに威圧されてスラスラと質問が出ない。

「お見受けするところ貴方は非常に健康で精力的に見えます。世界の偉人という偉人は自分の大きい責任を果すために何か健康を保つ秘訣を持っていたように思われますが、貴方はどんな保健の方法をとっておられますか。」

ウイルソン氏は笑いながら「これといって別にないが一週に一度ゴルフをするのが楽しみです。しかし忙しいので必ず一週に一度できるとは限りません。それよりも最大の慰めは今日一日、自分はベストを尽したという安心感です。これがあると一べんに疲労は吹きとんでしまいますよ。」と極めて早口に語った。

「夜は早くお休みですか。」

「いいえ早いとは限りません。しかし家庭に帰ると静かなのでくつろげます。」

アメリカでは人に会って公務を話すのは大抵オフィスに限られているようだ。従って家庭は休息の場所になっているのである。日本では家庭訪問が無闇に多く、こういう具合に家庭が休息の場所になり切っていないのは困ったものだと思つた。

「貴方はいま秘書から何つと今日も日本の鉄と鋼材、アルミニウム並びに船腹に関する政府連絡会議に出ておられたそうですが、日本産業の長所と短所について率直な御意見を伺うことが出来れば幸いです。」

「問題は船腹です。現在のように全幅的にアメリカの船腹に依存しておる状態は困つたものです。いち早く自分の船腹を充足することが必要です。それから信用が大切です。私がゼネラル・エレクトリックに関係していた当時、オーストラリアに電球を送っていました。私のところの売値はたしか三十五セントであつたと思います。ところがお国の電気会社が十七セントで売るといふので、オーストラリアの商人はお国の電球を買つたところ、その多くは電気がつかなくなつたそつで、結局、私のところに再び注文が違つてくるようになります。こういう心掛けではダメです。」

「それは終戦直後のことでしょう。その当時、日本には群小の電球会社が乱立して粗悪な品を出してわれわれも困っていました。現在では東芝や東光が復旧していい品物を造っています。」

「そうですね。私は世界のいずれの国よりも、お国の立直りが早いと思います。国民にそれだけの能力があると思います。……（とってから急に話題を変えて）一九四一年の秋、日本から四人の訪客があり、いろいろお世話したが、そのなかの一人が立派な七宝の花瓶を送ってくれた。終戦後その人がまた訪ねてくれたが、私にはその人が同一人であると思えない程彼の髪は白髪になり顔立ちがやつれて、いかにもいたいたしい姿でした。そこで私は、この人は戦争で苦労されたのだと直感しました。戦争はいずれにしてもよくないことです。早く平和になりたいものです。」

と氏にしては妙に感傷的な面持でそういった。  
 「自分はいくつかの会議に出かけます。もしお入用でしたらいろいろ資料がありますから、次長のエリオット博士のところに行ってください。幸運を祈ります。」

そこで私はエリオット博士を訪ねたところ、博士はハーバード大学の政治哲学と経済学の教

授で、ウイルソン氏の懇請によって動員計画に参与しているということであった。いかにも人のよさそうな老紳士で、ウイルソン氏とは対蹠的な感じを受ける人である。氏はウイルソン氏が大統領に動員計画の報告をした文書の写しを二つ私に渡してくれた。一つは今年の四月の報告で表題は「アメリカ国防力の建設」となっているし、他の一つは今年の七月の報告で「国防目標の達成」となっていた。

### ロックフェラー 附ニューヨーク

渡米後四十日もの間ワシントンに滞在した私が、ニューヨークに行ったのは九月二十八日の夕刻であった。ここでは一週間滞在の予定なので、手際よく駆け廻らねばならなかった。私は是非ロックフェラーと知事のデューイに会ってみたいと思つて、ニューヨークに着いた翌日、先づ國務省の出張所に行つて、予めその意を告げて依頼しておいた。ところがデューイ氏は、生憎欧州旅行中で会えなかつたが、ロックフェラー氏は、五日ほど経つてではあつたが、悦んで引見してくれた。

ニューヨークの繁華街にロックフェラーセンターという六十七階の大きいビルディングがある。ロックフェラー関係の事業会社がオフィスをもっているところであるが、その五十六階に、当のロックフェラー氏の部屋がある。黒人の守衛に來意を告げると、直ちに連絡してくれて、当主ロックフェラー三世と彼の部屋で会見した。その部屋の窓からハドソン河を見下すと、小さい葉っぱのようなものが突堤にくっついていて、彼は、

「あれが、大西洋航路で有名なクイーン・メリー号です。小さいように見えますが、あれを縦に立ててみるとこのビル位の高さになりますよ。」

と言つ。それ程このビルは高い。

彼の部屋は、私が想像したより小さく且つ粗末であつた。五間四方位の部屋で、片隅に彼の机が無造作においてあつた。前と後に抽出しのある机で、來客の方に向いている抽出しのくちがねがとれて、糸を連ねてくちがね代用に使っている。机の上に古い手提かばんと二、三本の鉛筆が置いてある。机の背後の壁には、四尺四方位のパステル画が懸っている。それは漁村時代のニューヨークの港に、帆船の帆柱が林立している景観を画いたものである。机の向つて右にマントルピースがあつて、その上に五、六十冊の洋書が積んである。部屋の片隅に、四、五



人が坐るに足る程の応接セットがある。ざつとこつという粗末な部屋であり簡素な調度である。世界屈指の大資本家の部屋とは、どうしても思えない。

彼は自ら椅子を運んで来て、「どうか御かけ下さい」と丁寧に挨拶する。淡い空色の洋服に、エビ茶のネクタイをつけているが、服装もどちらかと言えば地味であり、物柔い物腰で、静かに語り続けるのであった。

「私は、貴方が経営されているロックフェラー財団のことを伺いたいと思ってまいりました。一体あれは何時頃からお始めになったのですか。」

「一九一三年です。その当時南米諸国に十二指腸の病気が流行しました。そこでこの人類の災危を何とか取除かなければというので、財団を設立して、医学の研究と普及に当たつたわけです。」

「現在はどのような仕事をしておりますか。」

「財団設立の本旨は、ヒューマンティイの實踐に尽きると思います。そのためには病気をなくすることと食物を殖やすことが一番大切だと思ひます。医学の研究と普及の他、特に農事の改良に意を注いでおります。中国は、世界の中でも特に衛生状態がよくないので、医科大学を作

り又病院も経営しております。」

「今日までどの位お金をつきこまれましたか。」

「財団設立以来の累計は、三億五千万ドル位になっていると思います。」

「先年日本にも来られたようですが、日本でも同様の御計画がありますか。」

「今のところ具体的に申し上げられません。目下、日本の状態を調査中です。私も日本に興味をもっております。来月、再度東京にまいりたいと思っております。それに財団の事業計画は、理事会で決定されます。当財団の特長は、自らの手で直接調べて確信がつかなければ実行に移さないことです。セカンド・ハンドの資料によって計画を立てるといふことはいたしません。それだけに財団に来ていただいている学者は、少数ながら世界有数の方々です。」

「財団では、有為の学者や学生に奨学資金を出されていると聞いていますが、日本の学者や学生も、御心配していただけるのですか。」

「今のところ、日本の方々を御世話するようにはなっておりません。この場合のやり方は、アメリカの有数な大学の推薦が要ることになっています。」

「これからもドンドンお金を出捐されますか。」

「一生かかって懸命に努力するつもりです。ヒューマニティのために。」

私は彼の質素な生活ぶりとは謙虚な態度に痛く心を打たれた。彼の一言隻句の中にヒューマニティに対する強い情熱と厳肅なる責任感をよみとることができた。彼の所有のもとにある巨億の財産は、人類によつて厳肅に彼に信託されたものであるという神々しい使命観が覗えたように思った。住みよい世界は、単なる貧血した社会主義理論や思い上つた革命理論から生れるものではない。マルクスの鋭い分析によつて、その正体を露呈されその運命を予断された独占資本も、かような誠実で使命観に富んだ信託者の営為を通して、再び恵まれない人類に還元されているのだということを、まざまざと感じとることができた。巨大な私的資本は、このような人物を媒体として公的な資本に練り直されて行くのだ。そしてその方が、流血の革命を伴わない許りが、資本の人類の効率を一番よく生かす所以ではなからうか。

ロックフェラー氏の下を辞して、私は再びタイムス・スクエアの雑沓の中に帰ってきた。雲をつくような高層建築が楡比して異様な重量感を感じる。ニューヨークの街は、正に鋼材とセメントと大理石の巨大な堆積物だ。この市の十五億ドルに及ぶ市金庫の歳入の半分が、この建物とその建物の堆積されているマンハッタン島の土地に賦課する固定資産税の収入によるのだ

(先年日本に来て一連の税制改革と共に固定資産税を勧告して行つたシャウブ博士も、この市にある古いコロンビア大学の商学部にいるので、私は暫時ニューヨーク市財政を彼と共に語り合つた)。

しかし、私は、ニューヨークの街そのものとして見る前に、帆柱が林立した淋しい漁村から僅か百七、八十年の間に、日本全体の富に必適するだけの近代都市ニューヨークを作り上げたアメリカ国民の節約と勤勉の美德に頭が下るの覺えた。アメリカは決してジャズの国でも享樂の国でもない。キリスト教的な使命觀に根ざした質朴で勤勉なアメリカ人が、自力で地上と天国に架橋を試みている、逞しい營為の国だと言えよつ。